

静岡平和資料センター所蔵資料図録

# 未来につなぐ モノが語る 静岡の戦争



未来につなぐモノが語る静岡の戦争



静岡平和資料館をつくる会

静岡平和資料館をつくる会

静岡平和資料館をつくる会

本体価格 1,200 円 + 消費税



## 目次

ごあいさつ.....	1
静岡平和資料館をつくる会 代表 市原壽文	
凡例.....	2
目次.....	3
「戦争体験の継承という新たな挑戦」… 東京大空襲・戦災資料センター 主任研究員 山本唯人	4
のこされたモノの物語.....	7
ライフヒストリー.....	29
静岡の人びとと戦争.....	41
資料データ.....	75
「静岡・清水 空襲の記録」.....	108
図録関連年表.....	116
「静岡平和資料館をつくる会」のあゆみ.....	118
参考文献一覧.....	120
編集後記.....	121

## のこされたモノの物語

藤吉は戦死しました
血染めの千人針
軍用兎は空を飛んだ
KUVOHIUKA
焼夷弾の慰霊塔
陽子さんのもんぺとたび
父の自転車の標識
清水空襲体験絵巻
五千個ハ絶タイニ作ラナイ
彩帆島戦記
資料データ



# 藤吉は戦死しました

1937年(昭和12)は日本と中国にとって一大転機となる年だった。

7月7日北京郊外盧溝橋での演習中の日本軍と中国軍との軍事衝突は、上海への派兵、上陸を経て、首都南京戦へとつながっていく。中国軍の抵抗は頑強で、戦は凄惨なものとなった。

手紙\*に出てくる藤吉も上海戦で戦死した。『歩兵第三十四聯隊史』を繰ると、齊藤藤吉は9月18日戦死と記録されている。

手紙は、齊藤藤太郎が戦死した息子藤吉の最期の様子を伝えてくれた戦友、山田喜作の父順造に宛てて書いた礼状である。

流麗な文字で書かれた手紙では、戦死したことについて「天皇に捧げた息子の命、これに過ぎる名誉はない」と言い切っている。しかし…、涙は流れ、息子の最期が心にかかる。

「藤吉は戦死しました」。自分に言い聞かせるように、父は書いた。

静岡市西草深町一三四  
山田順造様

詩啓

有りかたも勿体なき御手紙  
紙は今家中に拜見  
致した  
萬感胸に迫り何ぞ御  
禮申上らばよや奇に  
縁に結んで藤吉と  
之なきで御慈愛賜り  
萬分の御報恩しかば  
死な行な事と思ふに又  
思はず涙が流れて来ます  
上海御居に旅団友  
関ふちの公報賜り  
藤吉の戦死の確實に  
天皇陛下の御為に捧げ

関ふちの公報賜り  
藤吉の戦死の確實に

天皇陛下の御為に捧げ  
な名譽なきに涙け出づ  
心残り御居ました  
千里萬里の海を渡り  
の七十の老いた身を鞭打  
藤吉の戦死の情況と  
行な末に思ふに  
御親切に御居  
て戦友の御居に  
目あり藤吉名譽に  
戦死の御居に  
藤吉の戦死

戦死の御居に

藤吉の戦死  
思ふに御居に  
熱い御居に  
程の縁に御居に  
然し御居に  
身御十年の御居に  
以上身御居に  
藤吉の戦死の御居に  
捨た御居に  
敬白  
齊藤藤吉父  
齊藤藤太郎  
山田順造様  
御居に

山田喜作の父順造に宛てて書いた手紙の複製。複製は流麗な文字で書かれた手紙の複製。複製は流麗な文字で書かれた手紙の複製。



# 血染めの千人針

「ご無事でお帰りを」と口に出して  
言えない時代だった。

花田秀夫さんの家族は、体に巻ける  
ほどの白い木綿の布に千個の点をつけ  
た。その上に一針一針縫って瘤<sup>こぶ</sup>を作り、  
弾が体に当たりませんようにと祈りを  
こめて千人針に仕上げ、出征する秀夫  
さんに持たせた。

ここにある血痕と弾丸が通った跡の  
ある千人針は、家族の思いが届き、無  
事帰還できた秀夫さんのものである。

秀夫さんは1938年(昭和13)、20  
歳で歩兵第34連隊に入営し、間もな  
く戦場に送られた。1939年、信陽付  
近の激しい戦闘で右腰に被弾した。上  
海の野戦病院で小銃弾の摘出手術を受  
けた後、静岡陸軍病院で療養し、無事  
帰宅することができた。

1944年には赤紙で召集され、再び  
中国戦線に送られ、人には語れない体  
験をした。

「この千人針に命を守ってもらいま  
した」と、秀夫さんは千人針と摘出さ  
れた小銃弾を1992年(平成4)当セン  
ターに託した。





# 軍用兎は空を飛んだ

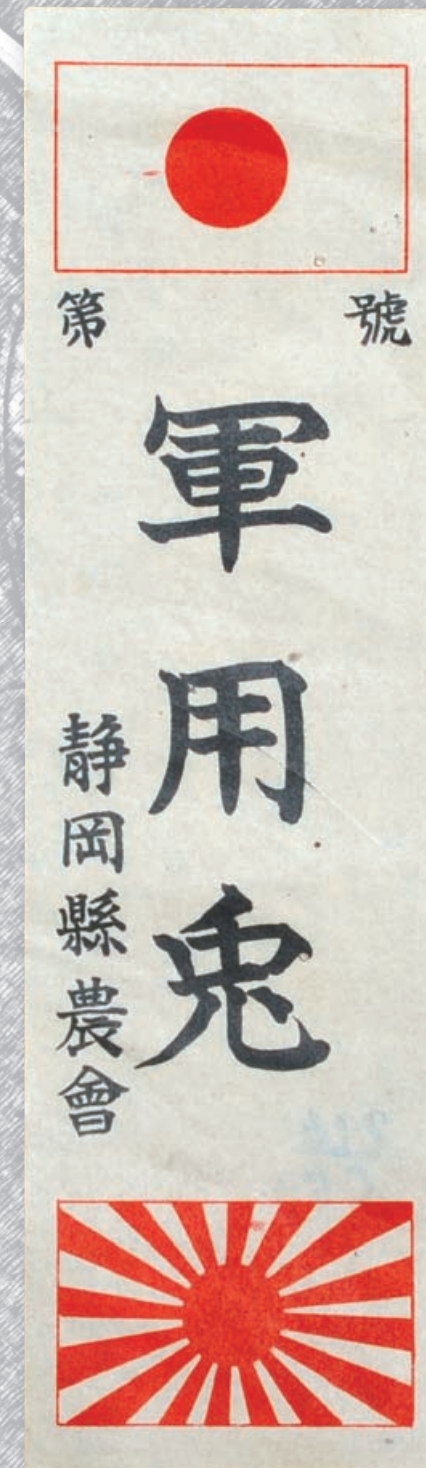
1942年(昭和17)12月16日発行の「大政翼賛」新聞に次のような記事があった。「荒鷲の着る飛行服の裏についている毛皮は兎の毛皮です。零下30度という土地で護りを固めておられる兵隊さんの、防寒服や防寒帽にどうしても必要なのが兎です。仔兎は市町村の農会に頼めば、売ってくれます」。荒鷲は、勇猛な戦闘機乗りのことである。

また、大日本画劇株式会社発行の紙芝居には「兵隊さんが着る防寒服を作るのに、兎の毛皮30枚が必要です。だから私たちは兎を飼ってお国のお役にたたなければなりません」と。

小学校、国民学校の子どもたちは、国策に従って兎を飼った。

静岡市内に住む大塚久美子さんは「小学校3年生、4年生の頃、家で兎を2羽飼いました。兎の品評会があったので学校へ持って行き、品評会に参加しました。優勝はできなかったけど、参加賞をもらいました。優勝した子は賞品をもらったそうです」と語った。

兎ばかりではない。馬・犬・鳩も、軍馬・軍犬・軍鳩の役割を与えられ、戦争に駆り出された。静岡市沓谷の陸軍墓地には、戦の犠牲となった動物を慰霊する石碑が建っている。





# KUVOHIUKA

## 空母日向

子どもの着物にも流行のデザインが取り入れられ、軍艦や飛行機、戦車、大砲などが描かれた。

横山忠雄さんの妹、美恵子さんは語る。

兄は1940年(昭和15)1月1日に生まれました。この祝着は兄のもので、ロープウェイに『KUVUHIUKA』の文字がみえます。

兄が5歳の6月20日、二番町の家が空襲されました。暗い防空壕の中で、兄は怖ろしさに泣き叫んだといいます。3歳の私には、母と、貯水槽の水をかぶって逃げた記憶があります。

父は出征していて、空襲の夜にはいませんでした。幸い、家族はみな無事に逃げのび、親せきの家に身を寄せて疎開生活が始まりました。

その後、父も戦地から帰ってきました。しかし、父が戦地でのことを家族に話すことは、ついにありませんでした。

兄は建材屋を営んで戦後生き、今も健在です。





# しょうい だん 焼夷弾の慰霊塔



空襲記念塔と書かれた焼夷弾の殻である。きれいに色が塗られている。なぜ焼夷弾の殻に色など塗ってきれいにしたのだと疑問に思う人もいるだろう。

1945年(昭和20)6月20日未明、静岡市はB29の空襲によって市街地の約3分の2を焼失した。

西川庄三郎さんの家族も安倍川方面へ走ったが、降りかかる焼夷弾で街はたちまち火の海となり、阿鼻叫喚の巷と化した。容赦なく降りそそぐ焼夷弾の1つが、庄三郎さんの妹、14歳の貞代さんを直撃した。

憎んでも憎み切れない焼夷弾であるが、家族はそれを持ち帰った。貞代さんと一緒に。

きれいに化粧された焼夷弾の殻は仏壇にあげられた。

悲しみのどん底にあった母は、若くして逝ったわが子が早く成仏できますようにと、朝な夕なに香をたいて手をあわせた。

B29によって奪われた命があったことを忘れないでほしいとの、家族の切なる願いが、この慰霊塔に込められている。





# 陽子さんのもんぺとたび

陽子さんは6月20日真夜中の空襲で避難途中、左足に焼夷弾の直撃を受け、安倍川に転げ落ち、「おかあちゃん、おかあちゃん」と泣き叫びながら流された。おぼれる人を川から助け上げていた父親が偶然に、陽子さんを見つけ河原に引き上げた。

陽子さんは家族により日赤病院に運ばれたが、「勉強の支度したくしなきゃ、明日、学校で考査があるから」の言葉を最後に、夕方亡くなった。

「戦争も終わり、昭和21年夏、七番町に戻ってからも、突然母は泣き、父も長男の私も途方にくれた。それはいつまでも続いた。果てしなく続くと思われた。母は陽子が被爆ひばくした時はいていた紺こんがすり縞がすりのもんぺを畳に広げ、いとおしげに撫でては泣いた。きれいに洗濯されていたが、左脚部はぼろぼろのままだった。折につけたんす箆す筒すから出しては眺め、かき抱いては泣くのがだった。形見のもんぺを手にしても、泣くことなく冷静に思い出を語るようになったのは何十年後だったろうか」。

(「 」は兄・柴田慎さんの手記より)





# 父の自転車の標識



三浦鐵太郎さんが乗っていた自転車の標識だ。

鐵太郎さんは、6月20日の空襲で行方不明になった。家族が見つけたのは父の自転車だけ。会社のマークの標識が、自転車は父のものであるという証となった。

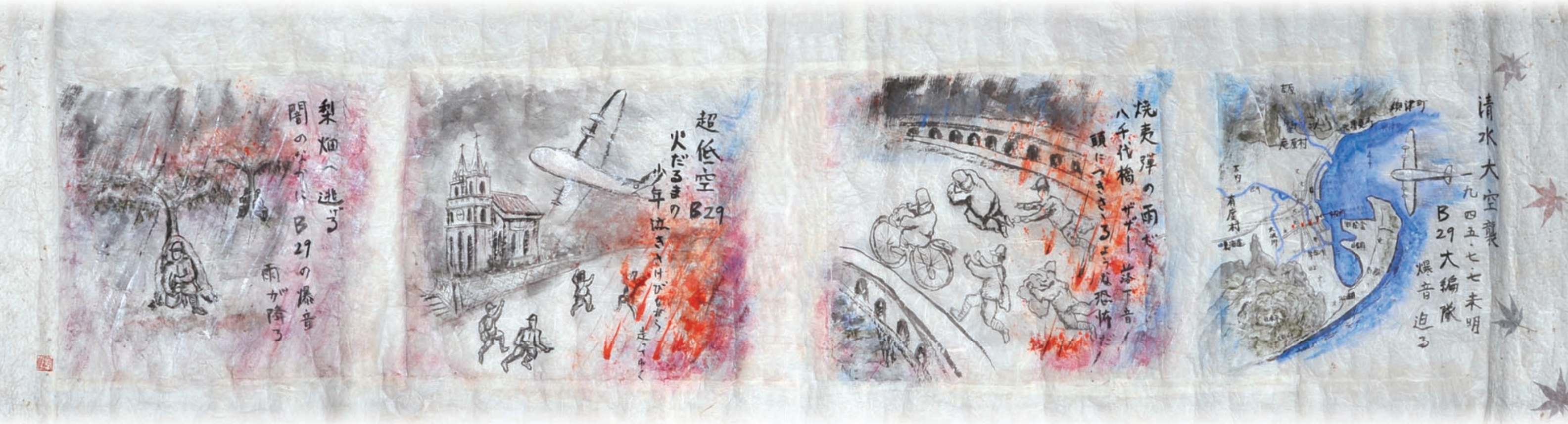
子、正恵さんは書いている。

「わが家は、空襲の1か月前、仕事のある父（軍需産業従事のため徴兵猶予）のみを残し、市内から六里ばかり山奥の山村に縁故疎開していた。母（臨月だった）と長女の私（小4）、妹（5歳）、弟（2歳）の4人。空襲の夜は、静岡の炎上するのをただ遠望するばかりだった。その炎が父を焼殺したなどとは露知らずに。

一緒に逃げた人たちによれば、父は本通りのロータリーの中で消え失せたという。雨あられと降る焼夷弾の直撃を受け、粉みじんに飛び散ったのか、遺体はついに見つからなかった。37歳だった。その20日のち、末妹が生まれた。父不在の誕生であった」。



# 清水空襲体験絵巻



1945年(昭和20)7月7日、午前0時過ぎから清水市はB29の空襲を受けた。

万世町に住んでいた鈴木玲之<sup>れいじ</sup>さんは、静岡中学の3年生だった。

B29爆撃機の爆音。突然低空で近づいた。親子4人は着の身着のままあわてて逃げ出した。八千代橋の上まで走った時、ゴーッという大爆音と同時に焼夷弾の雨。1回目の攻撃だった。それから100mほど走って教会の前の坂あたりで2回目の焼夷弾の雨。右側を火だるまになった少年が泣きながら逃げて行った。

逃げまどう中で、気がいたら家族はばらばらになっていた。激しい音の中、暗い方へと逃げ、たどり着いた所は堂林の梨畑。雨が降ってきた。梨畑をさまよううちに弟を見つけることができた。

玲之さんは、後に自らの体験を「清水空襲体験絵巻」に描いた。

さらに、玲之さんは恐ろしかった空襲体験を後々まで伝えたいと考え、空襲に遭った人びとを訪ね、当夜の事を聞きながら数多くの絵に仕上げた。



# 五千個ハ絶タイニ作ラナイ

シベリアのハバロフスク地区、ティルマの駅舎のレンガ。

レンガには「五千個ハ絶タイニ作ラナイ」と刻まれている。文字は何を言いたいのだろう。

戦争が終わっても、抑留されたシベリアで強制労働をさせられた元日本兵が、五千個のレンガをつくれと命じられたとき、無言の抵抗をレンガに刻んだのではないだろうか。酷寒のシベリアで「ダワイ、ダワイ（急げ、急げ）」とわめき散らされるなか、息を殺した精一杯の抵抗だったかもしれない。

古くなった駅舎の解体をしたときに、住民が日本の文字の刻まれたレンガを見つけ、保管しておいた。それを、シベリアで死んだ兄たちの慰霊碑<sup>かみとまいひろし</sup>をつくるためにティルマを訪れた清水の上斗米<sup>かみとまいひろし</sup>さんに、地元の青年が届けてくれた。

文字を刻んだのが誰であったか、今となってはわからない。が、上斗米さんは兄を偲んでレンガを抱いて帰国した。

ロシアの検疫所は特別の配慮で、レンガの国外持ち出しを認めてくれたという。





# サイパン 彩帆島戦記



サイパン島 南洋桜



テニアン島 清水は、この島から飛来したB29によって空襲された



サイパン島 放置された旧日本軍兵器

1944年(昭和19)6月、清水在住の近藤軍八郎さんは警備兵としてサイパン島にいた。上陸した米軍に追われ、ジャングルをさまよひ、島の北端まで追い詰められる。幾度もの銃撃戦で瀕死の重傷を負った軍八郎さんは、民間人初子さんの献身的な看病でからも生き延び、帰国することができたが、初子さんは洞窟で米兵の銃弾に倒れた。軍八郎さんは帰国後、初子さんのために鎮魂の写経を続けた。「彩帆島戦記」は、悪夢のような戦闘の実際をあますところなく伝えている。

現在は、サイパンは観光の島だ。観光客が一面に広がる青い海を満喫している。そんなサイパン島も、海にも山にもいたるところに戦車や大砲、医療器具から人骨までが、当時のまま残されている。この美しい島で人びとが殺され、崖から身を投げ自分の命を絶つという惨劇が起きたことを改めて感じる事ができる。

サイパン島は、第一次世界大戦中から30年にわたって日本が統治し、南洋群島とよんだ島の一つである。多数の日本人が移民として島に渡り、サトウキビを栽培し、漁業を営んだ。島にはチャモロ人、カロリン人も住んでいた。

島は日米の激戦地となり、4万人の日本兵と1万人の民間人が死亡。「玉碎(全滅のこと)の島」といわれた。

米軍はグアム島・サイパン島・テニアン島を制圧したあと、日本本土を空襲するための飛行場を建設する。テニアン島から飛び立ったB29は、1945年7月7日、清水を空襲した。





\*手紙P9

謹啓  
 有りがたくも勿体なき御手  
 紙只今家中にて拝見  
 致しました  
 万感胸に迫り何から御  
 礼申し上げてよいやはかりません  
 奇しき  
 縁にしに結ばれて藤吉を  
 こんなにまで御慈愛賜り  
 万分の御報恩もかなはず  
 死んで行った事を思ふと又  
 思はず涙が滲んで参ひります  
 上海に御居でにられる旅団長  
 閣下よりも公報を賜り今は  
 藤吉の戦死も確実になり  
 ました  
 天皇陛下の御為に捧げ  
 まひらせた藤吉の命之にすぎ  
 たる名誉とてもなく、涙は出づれ  
 ども悲しいとは露存じませんが  
 どんな死に方をしたのかそのみが  
 心残りです御座いましたとへ  
 千里万里海の彼方でも此  
 の七十の老ひた身を鞭打って  
 藤吉の戦死の状況をしら

へに行つて来やうとさえ思つていま  
 した処、御親切なる御はからひ  
 にて戦友よりの便を賜り  
 目のあたり藤吉の名誉の  
 戦死を見る様な気が致  
 します  
 藤吉は戦死しました  
 思つてもかへらぬ事ながら又  
 思は胸に迫つて目頭が  
 熱くなって参ひります  
 短い御縁で御座いました  
 然しかうしたご親切に預つた  
 身は幾十年の永い御交り  
 以上に身に沁みて参ひります  
 藤吉亡き後も何卒御見  
 捨てなく御交情お願  
 申し上げます  
 敬白  
 故陸軍歩兵伍長  
 齊藤藤吉 父  
 山田順造様  
 御一同様  
 齊藤藤太郎

『所蔵資料図録』より抜粋しております。  
 Web閲覧が可能なページはここまでです。

資料データ

ページ	登録番号	モノの名称	寄贈者
P8・9	1953	手紙	山田喜策
P10・11	0270	血染めの千人針	花田秀夫
	0272	小銃弾	花田秀夫
P12・13	0716	戸口票（軍用兎）	長島麻夫
P14・15	1459	祝着	大坪美恵子
P16・17	0404	焼夷弾	西川庄三郎
	0405	写真（西川貞代）	西川庄三郎
P18・19	1837	普段着（柴田陽子着用）	柴田慎
	1839	もんぺ（柴田陽子着用）	柴田慎
	1840	足袋（柴田陽子着用）	柴田慎
	1841	防空頭巾（柴田陽子着用）	柴田慎
P20・21	0393	自転車の標識	市原正恵
P22・23	1528	清水空襲体験絵巻	鈴木玲之
P24・25	1733	シベリアから戻ったレンガ	上斗米熙
P26・27	1734	『彩帆島戦記』上下	近藤軍八郎